

# 伝え合う楽しさを学ぶ小学校英語

— 学級担任を中心とした授業づくり —

香西麻理<sup>1</sup>

小学校外国語活動では児童が人とかかわりながらコミュニケーションの楽しさを学ぶことが大切である。児童にとって身近で、実態をよく把握している学級担任は、児童の発達段階に応じた活動を設定することができる。そこで、担任の持っている特性を生かした、コミュニケーションの楽しさを体験する授業を実践した。その結果、児童の意欲の高まりが見られた。

## はじめに

平成23年度から小学校外国語活動が必修化となり、5・6年生で年間35時間を確保することとされている。しかし、現状では学校間で指導時間や内容にばらつきがある。

所属校では年間5時間程度の英語活動がALT中心で行われている。必修化で授業時数が増えることによって、学級担任が単独で授業を行う機会が増えるが、これから本格的に英語活動の授業づくりに取り組む本校でも、授業を行うにあたっての指導法の不安や、高学年児童の発達段階に合わせた活動の工夫などの課題がある。

学級担任は普段から児童とのかかわりが深く、一人ひとりの発達段階を考慮した励ましを行うことができる。また、他教科で学んでいる内容を取り上げたり、英語を日常の学校生活で慣れ親しませる場面の設定が可能である。

そこで、このような担任の特性を生かした授業づくりを実践し、高学年児童が友達と協力しながら伝え合う楽しさを学ぶ活動について研究を進めた。

## 研究の内容

### 1 英語活動におけるコミュニケーション

#### (1) 小学校外国語活動の目標

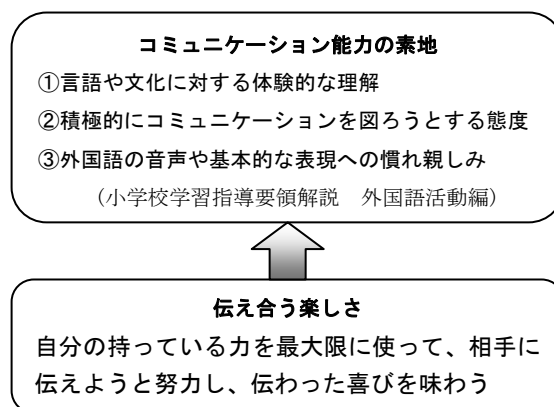
平成20年3月の小学校学習指導要領の改訂により、外国語活動が新設された。その目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」とされている。この目標は、中学校学習指導要領での「コミュニケーション能力の基礎」を養うことにつながるものであり、コミュニケーション能力の素地とは、中学

校、高等学校でさらに高めていくコミュニケーション能力の基盤となる重要な部分である。

#### (2) コミュニケーション能力の素地を育てるために

コミュニケーション能力の素地とは、第1図に示すように「言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」（小学校学習指導要領解説 文部科学省 2008）という3つの柱から成り立っている。この3つの柱によって目指しているのは、児童が自分の国と外国の言語や文化の違いに気づき、お互いに積極的にかかわり合おうとする姿である。

コミュニケーション能力の素地を育てるには、児童が自分の持っている力を最大限に使って、相手に言いたいことを伝えようと努力し、伝わった喜びを味わう経験が大切である。その経験を重ねることが「伝え合う楽しさ」を学び、コミュニケーション能力の素地の育成につながると考える。



第1図 コミュニケーション能力の素地を育てるために

#### (3) 伝え合う楽しさを学ぶには

本研究では、児童が外国語活動を通して、伝え合う楽しさを学ぶために、「動機づけの工夫」「人とかわる活動」の二点に着目した。

動機づけの工夫は、児童が「なぜ外国語を学ぶのか」を考え、めあてをはっきりさせて活動に取り組むために行う。

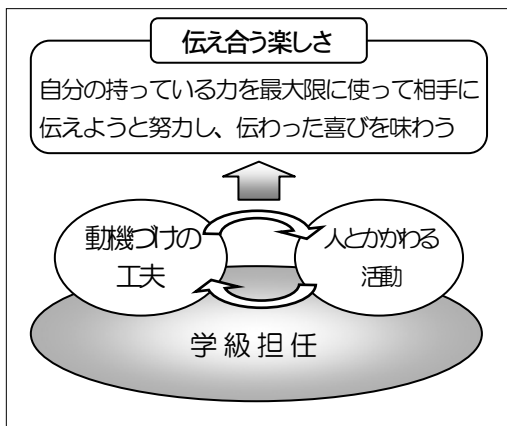
人とかわる活動は、相手を意識したコミュニケー

1 座間市立入谷小学校  
研究分野（外国語活動）

ション活動を通して、自分や友達を理解するために行う。

児童にとってコミュニケーションとは英語活動のみならず、日常生活でも必要なものである。伝え合う際にはなかなか思い通りに相手に伝わらなかったり、言っている意味が分からない時もある。その体験から自分なりに工夫してジェスチャーなどを使いながら、どうにかしてコミュニケーションを図ろうとする。その体験が人間関係を豊かにし、学習を深めるきっかけになる。

伝え合う楽しさは、「動機づけの工夫」「人とかかわる活動」が相互に作用し合い、これを支える学級担任が児童の実態に合わせて授業づくりを行うことによって、効果が現れると考える（第2図）。



第2図 伝え合う楽しさを学ぶには

## 2 学級担任を中心とした授業づくり

### (1) 英語活動の指導者に求められる力

低学年の児童はALTとの英語活動でも積極的に体を動かし、英語の発音も声に出そうとする。しかし、学年が上がるにつれて理解できないと不安を感じたり、間違ふことを恥ずかしく思うようになってくる。高学年児童は理解力も高まり、「自分の力を生かし、考える」活動に興味を示すようになる。指導者は児童の実態から「学びたいこと」「力を発揮できること」を把握し、活動に生かすことが大切である。

小学校外国語活動の指導者に求められる力として、以下の3つが挙げられている（「小学校外国語活動研修ガイドブック」文部科学省）。

- ①児童の発達段階を踏まえ、興味・関心を抱くような学習内容と活動を設定できること
- ②積極的にコミュニケーションを図ろうという気持ちを起こさせることができること
- ③英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることができること

これらの力が示すように、児童の実態を把握して授業づくりを行う英語活動の指導者として学級担任が担う役割は大きい。

### (2) 活動の工夫

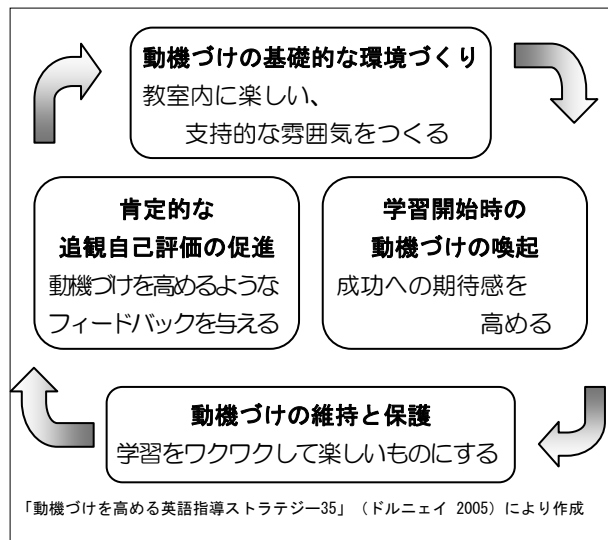
小学校の英語活動で大切なことは、活動に対してのイメージを持たせ、いかに児童に「英語を使ってみたいくなる気持ち」を起こさせるかである。そのために担任が行う英語活動の工夫を以下のように考えた。

#### ア 動機づけストラテジー

英語活動に初めて取り組む児童に対し、動機づけを高める工夫をすることによって意欲を継続させることができる。動機づけストラテジーを取り入れた小学校の英語活動について以下に述べる。

動機づけストラテジーとは、ドルニエイによると「個人の目標関連行動を促進する手法」と述べられている（ドルニエイ著 米山他訳 2005）。これは、学習の導入時だけでなく、学習の経過に合わせて指導者が学習者に適切なアプローチを行い、学習をより効果的にする手法である。動機づけの過程は、行動前の「発生させる段階」、行動段階の「維持させる段階」、行動後の「高める段階」に分けられている。

この段階は第3図に示すように4つの局面で構成される。各ストラテジーの項目には、動機づけを高める具体的な例が示されており、児童の様子を考慮しながら活動を進める際に有効である。



第3図 動機づけを高める指導実践

教室の雰囲気を楽しい、支持的なものにし、成功への期待感を高めることは、担任が他の学習活動でも意識していることであり、児童が安心して英語活動に取り組める環境づくりにつながる。ドルニエイは各場面に応じて35のストラテジーの項目を設定している。その中から16を検証授業での活動案づくりに参考にした。うち、8つを例示する(第1表)。

活動の中で児童が意欲を継続して持ち続けられるように取り入れたのは、「間違いは自然な流れだとする『児童が安心して英語活動に取り組める』項目(①②)」「成功体験を与え、意欲を高める『自信をつける』項

目(③～⑥)」「友達と協力して同じ目標に向かう『コミュニケーションの楽しさを味わえる』項目(⑦⑧)」である。

この動機づけストラテジーは時間をかけて行くと同時に、他教科でも行うことが望ましいとされている。小学校では担任が他教科等も教えているので、児童の意欲を高めるには適していると考ええる。

第1表 ストラテジー項目

	ストラテジー項目
①	間違いを恐れずにやることを勧め、間違いは学習の自然な一部であると思わせる。
②	生徒が楽しみそうなL2学習の側面を強調し、実演してみせる。
③	生徒が十分な準備と支援を必ず得られるようにする。
④	学習者に定期的な成功体験を与える。
⑤	定期的に励ましを与えることにより、学習者の自信を育む。
⑥	学習者の成績と進歩を観察して、どんな成功でも時間を取って祝う。
⑦	学習者間の協力を促進することにより、生徒の動機づけを高める。
⑧	学習者のチームが、同じ目標に向かって一緒に作業することが求められるタスクを設定する。

「動機づけを高める英語指導ストラテジー35」(ドルニエ 2005)により作成

## イ 人とかかわる活動

高学年児童が意欲的に英語活動に取り組むには、児童主体の活動の設定が大切である。その際、人とのかわり合いを重視した活動にすることで、知的好奇心が旺盛な高学年児童に合った内容になると考える。次のような視点で授業づくりを行った。

- a 英語を使ってみたくなる場面設定
- b 自分で選択したりアイデアを生かせる活動
- c 相手を意識したコミュニケーション活動

aでは、児童のやりたいことや興味のあることから題材を選び、簡単な表現を使って相手に通じた喜びを味わえるようにする。bは、児童が今までの経験を生かして工夫したり、いくつかの中から選択する場面を設定し、児童が主体的に活動に取り組んでいる実感を持てるようにする。cは、チームで協力し、相手の反応を見ながらコミュニケーションを図るようにする。

例えば、自分の好きな食べ物やスポーツなどを表現する際に、小学校の英語活動では「I like ~」が使われる。これを、さらに人とのかわり合いを深める活動にするには、「I like your ~」を使って友達の髪型や服、持ち物をほめることができる。高学年児童が関心のある題材を使って、「I like your hairstyle. (その髪型いいね!)」、「Thank you!」というやりとりになる。一方的に自分の好きなものを伝えるより、

ペアになった友達をよく見て、「何をほめたら相手が喜ぶか」を考えて表現を選ぶので、相手を意識したコミュニケーションを図ることができる。

## 3 検証授業

### (1) 児童の実態

平成20年7月に所属校の6学年の児童75名に事前アンケートを行い、実態を踏まえて指導計画を立てた。「英語(外国語)を学ぶことは必要だと思いますか?」という質問には「とてもそう思う(58%)」「どちらかというと思う(41%)」と、多くの児童が必要を感じていることが分かった。その理由は「大人になったら役に立つ」「世界の人と友達になれる」「困っている外国の人を助けられる」などであった。

「英語活動でやりたいこと」では、「ゲーム」、「買い物のかた」に次いで、「チームで協力して会話などを発表」という答えがあり、まだ一人では自信がないが、友達と協力してなら取り組みそうという児童の傾向が見られた。

また、「外国の人に英語で道をたずねられたらどうしますか?」という質問には、83%が「知っている英語やジェスチャーを使って何とか伝えようとする」と答えており、新しいことにも自分の持っている力を生かし、工夫して取り組むという意欲が見られた。

「人と話すときに大事だと思うこと」では以下のよう項目が挙げられた。

- ・目を見て話す
- ・あいづちをうつ
- ・相手に伝わるように話す
- ・明るく笑顔で

児童から出たこれらの「大事なこと」は、コミュニケーションの基本であり、授業で心がける事として毎回確認しながら取り組んだ。

### (2) 題材について

題材には、使う表現と役割がはっきりしていて児童が活動の見通しを持ちやすいという視点から、「私はだれでしょう? Who am I?」というクイズ作りを選んだ。円盤型の画用紙に描かれた有名人や動物の絵を少しずつ相手に見せながら「I am ~」、「I like ~」などの表現を使い相手にヒントを出し、答える側は自分が想像した答えを「Are you ~?」を使って答える活動である(第4図)。



第4図 「私はだれでしょう?」教材

まだ十分に英語の表現に慣れ親しんでいない所属校の6年生でも、基本の表現から発展しやすく、アイデアを生かしてヒントを作ったり、友達とやりとりができる題材である。

### (3) 活動内容

本単元は5時間扱いで行った(第2表)。導入ではオリエンテーションを行い、活動の見通しを示し、外国語を学ぶことについて考えた。クイズ作りでは、くり返し英語の表現に慣れ親しみ、発表会に向けてチームで協力できるような活動を設定した。

第2表 指導計画

第1時	オリエンテーション	Let's enjoy English!
第2時	私はだれでしょう?①	クイズに必要な表現を知ろう
第3時	私はだれでしょう?②	ALTの先生とクイズをやってみよう
第4時	私はだれでしょう?③	自分たちでクイズを作ろう
第5時	私はだれでしょう?④	チームでクイズを発表しよう

#### 【第1時】オリエンテーション

第1時では、クイズや意見を話し合う活動を入れて児童用に作成したプレゼンテーションを使い、外国語活動では、間違いは自然なものであり、外国語を学ぶことで今までと違う視点で物事を見られるようになるなどの説明を行った(第5図)。

児童は、言葉を使わないで相手に自分の好きなものを伝え、言葉を通じない状況でどのように相手に思いを伝えるかを疑似体験し、コミュニケーションを図る際に、発信する側、受け取る側に大切な態度について体験をもとに考えた。

授業の終わりには、それぞれが英語活動で「こんなふうになりたい」「やってみたいこと」などのめあてを持つようにした。言葉を通じない状況でもジェスチャーなどを使って伝えられたという自信から、これからもっと英語を頑張ろうという意欲が見られた。



第5図 児童用プレゼンテーション

#### 【第2時】表現に慣れ親しむ

クイズ作りに必要な英語の表現は、一度にたくさんは覚えられない。第2時から、くり返しゲームやチャンツを行いながら表現に慣れ親しめるようにした。

まずクイズを紹介し、これから自分たちでクイズを作る活動を行うことを知らせた。ヒント作りを使う表現は一人称に統一し、役になりきって「I am ~」「I like ~」とヒントを出すようにした。tall, fast, strongなどの形容詞は絵カードや動作を入れながら少しずつ増やしていった。

#### 【第3時】ALT との英語活動

担任が主になった ALT との授業では、児童が会話の役割をイメージできるように担任と ALT がクイズのヒ

ントの出し方や質問のやりとりを実演した。

実際にヒントを作る練習ではクラスが2つに分かれ、自分たちで英語のヒントを作り、相手チームに出題した。ペンギンについてのヒントは、「最初に鳥って言ったらおもしろいかも」「I am a bird. かな?」とアイデアを出し合い、分からない時は ALT に聞きながら考えた。

担任は児童の間を回り、ALT への質問や話し合いを支援した。児童は、高学年らしく、どの順番でヒントを出したらクイズが面白くなるかを考え、持っている力を発揮し始めた。

#### 【第4時】クイズ作り

ここでは、チームが同じ目標に向かって協力する課題を設定することにより、全員が参加できる活動を目指し取り組んだ。

児童は3人でチームを作り、イラストに対して3つのヒントを英語で考えた。イラストは使う表現が広がりすぎることと考慮し、今回は指導者が用意した。

まず、日本語でヒントを考え、それを英語で何というか考えた。今までに習った表現や、自分たちが知っている表現を活用し、「これ、英語で何て言うの?」とお互いに聞きながら協力していた。

難しい単語は日本語でも良いこととし(例: I like ドングリ.)、安心してなるべくたくさんの英語を口に出せるようにした。

#### 【第5時】クイズ大会

クイズ作りの発表の場として、クイズ大会を行った。なるべく近くでコミュニケーションを図れるように、それぞれのチームのブースを回答者が自由にまわり、クイズに挑戦した(第6図)。

準備の段階で、児童は自主的にヒントの出し方のリハーサルを行い、イラストの見せ方や声の大きさをお互いにチェックしていた。

チームのそれぞれが役割を分担してヒントを出すので、必ず英語を使うチャンスがある。最初は恥ずかしそうにしているも、相手からの反応が必ず返ってくるので少しずつ自信をつけながら発表することができた。



- Q. I have a ポケット.  
Who am I?  
A. Are you ドラえもん?  
Q. No! I live in オーストラリア.  
Who am I?  
A. Are you カンガルー?  
Q. No! I am グレー.  
Who am I?  
A. Are you コアラ?  
Q. Yes! I am コアラ!

第6図 クイズ大会



## 4 結果と考察

### 【動機づけの工夫】

動機づけストラテジーを使うことにより、活動の導入だけでなく、活動の途中でも児童が活動を楽しんでいるか、具体的なストラテジー項目と照らし合わせながら励ますことができた。その結果、児童はめあてに向かって生き生きと活動に取り組んだ。

例えば、活動中にどのように英語を使って相手とコミュニケーションをとればよいかイメージできず、なかなか自分から声を出せない児童がいた。「学習者に定期的な成功体験を与える」というストラテジー項目を参考に、まずは聞くことも大切なコミュニケーションであることを伝え、相手をきちんと見て聞いている姿をほめた。そして、児童が表現できる英語や日本語を使って相手に伝える場面設定を行い、小さな成功を積み重ねられるようにした。

児童のめあても具体的で身近なものとなった。活動を開始した時は「いつか外国に行った時に使ってみたい」「外国の人とペラペラ話してみたい」というめあても、活動後には、「ちょっとしたひとことを英語で言えるようになりたい」「中学でも楽しく勉強したい」という表現に変化していった。

児童は英語活動を通して、活動のイメージを持つことができ、英語をより身近なものとしてとらえられるようになったことが分かる。

### 【人とかかわる活動】

#### (1) チームで取り組む

チームで取り組むことによって、児童は「クラスみんなの前で間違えたら恥ずかしい」といった不安を感じることなく、初めての活動でも安心して英語の表現を使ったり、試したりできた。

所属校の児童は総合的な学習の時間に、チームでプロジェクト学習に取り組んでいるので、チームで活動する際の役割分担や分かりやすい発表の方法をよく理解していた。その経験を生かして英語活動に取り組めた。また、活動が進むにつれて新しい表現を知りたい、もっとおもしろいものを作りたいという欲求が生まれた。

これは、チームで取り組むことにより、それぞれが既習の学習から生かせるものを使ったり、自分と違った意見を聞くことができるので、お互いを高め合うことにつながるからであると考えられる。

#### (2) ふり返り

本単元では、めあてを書き込んだり、作業のワークシート、ふり返りシートをまとめた「えいご帳」を作り、児童が自分の成長を見られるようにした。

毎回のふり返りでは、児童の頑張りや困り感を知るよい機会となった。また、友達からの励ましのコメントをクラスで共有することにより、友達がどんな励ましの言葉をかけているかを知ることができた。

これによって、最初は「よくがんばっていたね」という友達へのコメントが、「何回も声に出してはっきり言えるよう練習していたね」「ジェスチャーを入れながら一生懸命英語を使っていたね」という具体的な励ましの言葉に変わっていった。

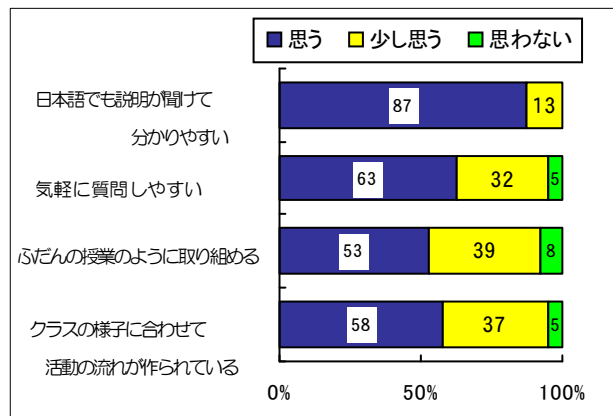
活動中、自己評価が低かった児童が友達からの励ましにより、自分のできることを見つけ、意欲的にクイズ作りに取り組めるようになった。これは、自分の活動を友達が見ていてくれたといううれしさや、同じ課題に取り組むチームの一員からの励ましが児童の意欲の高まりにつながったからであると考えられる。

このように、個人でふり返りを行った場合、それを学級で共有することで、児童が具体的な成長の姿をイメージでき、次への新たな目標につなげることができる。

### 【学級担任による指導】

#### (1) 学級担任中心の活動の効果

検証授業後のアンケートによると、「学級担任による英語活動についてどう思いますか」という質問には、第7図に示すように「日本語でも説明が聞けて分かりやすい」「気軽に質問しやすい」と感じた児童が多く見られた。



第7図 学級担任による英語活動について

高学年児童は、英語で「言えること」と「言いたいこと」に差が出てくる。日本語でのニュアンスを伝えて、それを分かりやすい英語にするという際には、児童が気軽に質問できる学級担任の支援が効果的である。

クイズ作りの活動中も、児童は伝えたいことを英語にしようと奮闘していた。あるグループでは指導者のアドバイスに「それじゃあ、簡単すぎてすぐに分っちゃうよ」と自分たちで納得がいくまで工夫している姿が見られた。

学級担任は児童の考えを尊重し、どこまで支援するかのバランスを調整しながら指導できるので、児童主体の活動がより深められると考える。

「今回の英語活動で楽しいと思ったこと」については以下の項目が挙げられた。

- ・世界で使われている言葉について知る。
- ・チームで協力して英語のヒントを考える。
- ・相手のヒントを聞いて、英語で答える。
- ・自分が出した英語のヒントに相手が答えてくれる。

学級担任が他教科のようにアドバイスや励ましを行いながら、チームでの活動に深くかかわったことにより、児童の話し合いや英語のやりとりがスムーズに進められた。

また、自分が英語を使うだけでなく、相手の反応が返ってくることに楽しさを感じている、という結果が表れた。今までの英語活動では英語の表現を「覚える」ことが多かったが、今回は「慣れ親しんで使ってみる」という活動内容であった。そこで間違えながらも頑張って使った英語に相手が答えてくれる喜びを味わえたのだと考える。

## (2) 全員が参加できる柔軟な指導

今までは数ヶ月に1回だった英語活動であるが、今回は5時間扱いでくり返し行うことによって、初めは難しいと感じていた児童も少しずつ自信を付けた。

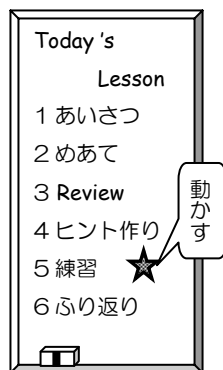
高学年の児童は、単元の大きな流れを説明し、活動の見通しが分かると自分たちで工夫し、進めていくことができる。

毎時間の活動内容を黒板に書き、進むごとに目印を動かすことによって、児童の活動がスムーズに進んだ。これは、視覚的に活動の流れをとらえた方が理解しやすい児童への配慮であるが、教師自身もテンポ良く授業を進めるために役に立った(第8図)。

また、複雑な説明は日本語で行うことによって、作業の時間を確保し、その時間に慣れ親しみたい英語の表現に集中することができた。

児童は一人ひとり、取り組むペースや意欲が違うので、すべての児童が成功体験を味わい、生き生きと活動に取り組むには、指導者や友達の励ましはもちろん、準備の時間を確保し、アドバイスを受けられるようにすることが大切である。

今回は学級担任単独の授業だけでなく、同じ学年の他のクラスの担任にSAT(スキット・アシスタント・ティーチャー)として会話の部分だけ参加してもらい、一緒に授業を行った。このように、学級担任による授業は指導の形態も柔軟に工夫できる。



第8図 授業の流れ

## 5 研究のまとめ

検証授業を通して学級担任のよさを生かした授業づくりとは何かを考えながら活動を計画、実践した。

学級担任が「動機づけの工夫」「人とかかわる活動」に着目し、授業づくりを行うことによって、児童の次のような姿が見られた。

動機づけの工夫は、担任が活動中も意識的に児童の動機づけを高めることによって、児童が自らの成長を自信として、次の活動に意欲的に取り組めるようになった。

人とかかわる活動では、それぞれの児童の思いや活動で学んだことをチームや学級で共有することにより、児童は自分や友達を理解し、円滑なコミュニケーションにつながった。

実際に児童と英語活動を行うと、指導の基本は他教科と変わらないことに気付かされた。普段から児童の近くにおいて、「育てたい力」のイメージを明確に持つことができる学級担任は、活動を児童の発達段階に合わせて発展させたり、修正したりできる。その工夫こそが伝え合う楽しさを学ぶ環境づくりにつながる。

学級担任は、英語活動でも児童の成長を促す、大切な存在であると考えている。

## おわりに

本研究では「伝え合う楽しさ」をテーマに児童が英語活動を通してコミュニケーションの楽しさ、大切さを学ぶ導入の活動を行った。

今後、児童が自分の思いを英語で表現する活動に発展した際に、「伝えたい気持ち」を大切に、人とかかわることを楽しみながら英語活動に取り組めるよう、担任が行う英語活動の新たな可能性を考えていきたい。

## 引用文献

- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東洋館出版 p. 7  
 文部科学省 2008 『小学校外国語活動ガイドブック』 p. 17  
 ゴルタン・ドルニェイ著・米山朝二・関昭典訳 2005 『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』 大修館書店 p. 30

## 参考文献

- 文部科学省 2008 「平成19年度小学校英語活動実施状況調査概要 集計結果」  
 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm) (2008.5.2取得))  
 岡秀夫 他 2007 『小学校英語教育の進め方』 成美堂  
 影浦攻 他 2007 『小学校英語セミナー No.27』 明治図書  
 河原俊昭 他 2008 『小学生に英語を教えるとは?』 めこん